

3. 民家の年代指標

石徹白地区の民家の年代を特定するものに、小屋組の架構（かこう）が挙げられる。

今回調査した建物で、切妻（きりづま）造の建物の小屋組の架構は、束立てのものと登梁（のぼりばり）の2つに大別できる。

束立てのもので、垂木（たるき）の材寸を見ると、太いものでは、石徹白伊織邸や上村佳孝邸で用いられている110mm角のものである。細いものでは60mm角程度で、この場合は垂木の間隔が小さくなっている。

登梁の建物でも、垂木の材寸は100mm角から80mm角程度で、比較的太い垂木を使用している。

建築年代が分かっている建物と小屋組の架構を比較していくと、古いものは垂木の材寸が大きく、新しくなるにつれて材寸が小さくなり、垂木の間隔が狭くなっている。登梁のものは、比較的新しく、2階建ての民家には必ず登梁が用いられている。登梁を用いた工法は、おそらく明治20年前後から使用されるようになったと推測される。およそその建築年代を考えると、右図のようになる。

4. 長滝地区との比較

石徹白地区の建物と比較するために、若宮修古館と経聞坊（きょうまんぼう）を調査した。



← 経聞坊（きょうまんぼう）の建物のうち、仏間正面に設けられた玄関。

↓ 長滝白山神社と若宮邸。美濃馬場（みのばんば）がおかれた白山本地中宮長滝寺が、明治初年の神仏分離令により、長滝白山神社と長滝寺にわかれただ。なお、若宮家主屋（おもや）は、県指定重要文化財。一般拝観もできる。



若宮家主屋外観

若宮家主屋 式台

若宮家主屋内観

5. まとめ

石徹白地区の民家は、白山信仰などの宗教により他の地域と異なり、家の中に信仰の場所をとるという、特殊な平面形式を持っている。

また、構造については、束立てと登梁（のぼりばり）の工法を取っていることが、特徴である。

多雪地域であることから、屋根の軒は短く、小庇も軒と同じかそれよりも短くなっている。

小屋組と共に、積雪のことを考えられて作られていることが分かる。

信仰集落としての平面形式と、多雪地域であるが故の構造形式は他に類例が少なく、学術的に貴重な建造物であるといえる。これら建造物だけでなく、集落全体の景観と共に建造物を残していく価値があるであろう。

【石徹白地区の民家の建築年代】

江戸末期	明 治	大 正	昭 和
<ul style="list-style-type: none">●石徹白伊織邸（1860年頃）●上村嘉則邸●加藤仁太郎邸●上村佳孝邸●久保田新太郎邸	<ul style="list-style-type: none">●上村和彦邸（明治2年）●上村重政邸●上村乙行邸（明治25年）●石徹白清住邸（明治26年頃）●鶴谷勝彦邸		<ul style="list-style-type: none">●上村市左衛門邸（昭和29年）



石徹白地区中在所の風景